認知的家事の分担と妻の生活満足度

○竹内 麻貴（国立社会保障・人口問題研究所）

1. 問題設定と背景

本報告の目的は，夫婦間での認知的家事労働の分担が妻の生活満足度に与える影響を明らかにすることである．家事労働は一般的に，料理や掃除，買い物などの身体的な作業を指す．他方で社会学においては，身体的家事に付随する非身体的な作業，すなわち認知的作業も家事として言及されてきた．認知的家事は，ニーズを予測し，それを満たすための選択肢を特定し，意思決定を行い，その後の経過を確認するという 4 段階で構成される．質的調査研究では，女性の方が認知的家事全体，特に予測やモニタリングの作業を多く行っていることが示されている．また，認知的家事は負担が大きい一方で，その作業の多くが不可視であるため，夫婦間の対立の原因となることが指摘されている（Daminger 2019）．このことから，認知的家事の分担状況は，夫婦関係ひいては生活全般に対する満足度に影響する可能性が考えられる．本報告では，夫婦間での認知的家事の分担状況と，それが妻の生活満足度に与える影響を明らかにする．

2. データと方法

データは，国立社会保障・人口問題研究所が実施している「全国家庭動向調査」の調査票情報を用いる．これまで行われた 7 回の調査のうち，認知的家事を尋ねた第 6 回（2018 年）と第 7 回（2022 年）調査のデータを結合して分析する．全国規模の質問紙調査で認知的家事について尋ねた調査はないに等しく，本データは認知的家事を定量的に分析する事ができる数少ないデータである．被説明変数は妻の生活満足度（自分の生活，夫との関係，夫の家事参加についての満足度）である．主な説明変数は，夫婦間での認知的家事の分担（食材や日用品の在庫の把握，食事の献立を考える，ごみを分類し，まとめる，家族の予定を調整する，購入する電化製品の選定の合計）である．妻の生活満足度への影響を認知的家事の分担と比較するため，身体的家事の分担も用いる．調整変数として，年齢，教育年数，妻／夫の就労の有無，妻／夫の年収，主観的健康を用いる．分析対象は，調査時点で夫がいる 20～64 歳の女性である．使用する変数に欠損があるケースを除外すると，分析に用いるサンプルサイズは 5,254 となる．

3. 結果

夫婦間での認知的家事の分担状況を記述的分析で確認すると，認知的家事の負担は妻に偏る傾向がみられた．5 つの認知的家事のうち，食材や日用品の在庫の把握と食事の献立を考えることは，約 9 割の夫婦が妻のみまたは妻を中心に行っていた．妻の生活満足度に与える影響を重回帰分析で確認すると，妻の認知的家事の負担が高いと，生活満足度は低いことが明らかになった．なかでも，家族の予定を調整する負担の高さと妻の生活満足度の低さに関連がみられた．また，認知的家事の負担の高さは，身体的家事の負担よりも妻の生活満足度の低さと関係していた．

文献

Daminger, Allison,2019, “The Cognitive Dimension of Household Labor,” *American Sociological Review*, 84(4): 609–633.

キーワード：認知的家事，生活満足度，家事分担